

北のとびら

vol. 135
令和7年3月



後志北東エリア
特集

特集 | 牧野時夫(北海道農民管弦楽団・代表) interview

北海道農民管弦楽団 音楽で心を耕す三十年の軌跡

アート巡礼 後志北東エリア／つくる人in岩内町 村本 剛／ジモトデザイン 小樽市・ミツウマ
マチカド芸術 小樽市『炎』／ART FILE 桑迫伽奈

宮沢賢治が夢見た農民オーケストラを実現したい



●北海道農民管弦楽団・代表／牧野時夫(まきの・ときお)
1962年生まれ。北海道大学農学部卒業、同大学院修士課程修了。本州のワイン会社に...

宮沢賢治が叶えられなかったその夢を、現代の農業に合った形で実現したいと考えるようになり...

牧野 大学院卒業後、本州のワイン会社に就職しましたが、「北海道で農業をやりたい、オーケストラを続けたい」という思いを叶えるため、宮沢賢治が教師を辞めたのと同じく30歳で退職...

グループの学習会で、学生時代に知り合ったフルト奏者や、北大オケ時代の先輩に再会し、農民オーケストラを作りたいたね、という話に花が咲いて。知人に声をかけたり、新聞にも取り上げられたおかげで、50名近いメンバーが集まりました...

牧野さんの音楽との出会いを教えてください。
牧野 両親が音楽好きで、バイオリンやピアノは幼少期から習っていました...

牧野 大学進学時は自然生態学に興味を持っていました。しかし、自然環境に最も大きな影響を与えているのは、農業ではないかと考えるようになり...

に、宮沢賢治との出会いがありました。彼は花巻農学校の教師という安定した生活を自ら手放し、農耕生活を送りながら、付近の農民を集めて農業や化学、芸術について教えていました...



北海道農民管弦楽団
宮沢賢治が『農民芸術概論綱要』で述べた理想に基づき、彼が果しえなかった夢を現在に蘇らせる試みで、「鎌で大地を耕し、音楽で心を耕す」をモットーに活動するアマチュアオーケストラ...



牧野時夫(北海道農民管弦楽団・代表) interview

北海道農民管弦楽団
音楽で心を耕す三十年の軌跡

農閑期に練習をして年1度の演奏会を開く農民オーケストラ「北海道農民管弦楽団」。
「鎌で大地を耕し、音楽で心を耕す」をモットーに音楽活動を続ける同楽団は2024年に創立30周年を迎えました...

PHOTO / 大橋泰之(マカロニ写真事務所)、溝口明日花(マカロニ写真事務所)

東北農民管弦楽団立ち上げのきっかけ

を披露しました。これが、北海道農民管弦楽団にとって初めての演奏でした。北海道農民管弦楽団は、結成当初から地方公演に力を入れていましたね。

牧野 地方の公民館や体育館などで演奏会を開くと、お客様の中には楽器を演奏できる農家さんがいて、「私も参加したい」と手を挙げてくれることもありました。最初の10年間は、演奏をし

ながら地方在住の団員が増えていく日々でもありました。この30年間で、道内約25市町村を巡っています。2011年2月には、デンマーク公演も実現しました。

牧野 デンマーク公演は、酪農学園大学が取り持つてくれた縁で実現しました。私たちのオーケストラには、酪農学園大学の教職員や学生も多数在籍しており、その中には北大オケ時代の先

輩で、酪農学園大学の教授もいました。酪農学園大学は、デンマークの農業と教育システムを基に創立された大学です。海外公演は一つの夢でもあったので、その先輩にデンマーク在住の特任教授を紹介していただき、とんとん拍子で演奏会が決まりました。デンマークでは現地のアマチュアオーケストラとも共演し、とても有意義な時間を過ごしました。



2025年の演奏会にむけて、2024年12月にKitaraの大里ホールで年内最後の練習を実施。道内各地からメンバーが集まり、牧野さんの熱のこもった指揮のもと、練習は続きました。



デンマーク公演の1ヶ月後に起こった東日本大震災や東北農民管弦楽団との関わりを教えてください。

牧野 宮沢賢治の故郷は岩手県花巻市です。東日本大震災は「音楽で、東北の力になりたい」と強く願った出来事でした。東北農民管弦楽団の代表・白取克之さんは、もともと北海道で農業実習をしていて、私たちの演奏会にも2回ほど参加していました。白取さんは実習後、故郷の青森に戻り就農しましたが、「東北にも

農民オーケストラを作りたい」と相談を受けたんです。我々も2013年1月に宮沢賢治没後80年記念として、花巻市での演奏会を企画していたので、そのタイミングで東北にも農民オケを立ち上げて一緒に演奏しませんか、と誘いました。それが、東北農民管弦楽団結成のきっかけです。花巻市での演奏会の翌日には、震災で甚大な被害を受けた陸前高田小学校でも演奏を行いました。

東北農民管弦楽団とは立ち上げ時から深く関わっていたんですね。

牧野 私は毎年、東北の演奏会に客演として参加していました。しかし、2019年末から新型コロナウイルス感染症が騒がれ始め、県境を越える移動の制限があ

り、東北農民オケは3年間の活動休止を余儀なくされました。その後、宮沢賢治没後90年にあたる2023年、直前で中止になってしまった花巻市での第九演奏会が3年振りに開催され、私も客演コンサートマスターとして参加しました。

コロナ禍は北海道農民管弦楽団の活動にも影響をもたらしましたか？

牧野 私たちは非常に運が良かったのかもしれない。感染症の流行間もない2020年2月初めに開催した演奏会は、まだ行動制限がない時期だったため、中止せずに実施することができました。それ以降の3年間、感染者数に応じて制限が緩和されたり、厳しくなったりと波があったと思いますが、私たちの演奏会はいつも緩和のタイミング。結果として、演奏会は一度も中止することなく続けることができました。

しょう。しかし、それは本当に「人間らしく生きる」と言えるのでしょうか。生命維持活動には関係のない文化芸術であっても、人間が生きるために大きな意味を持つ大切なものであると思います。

北海道農民管弦楽団は創立30周年を迎え、今年の2月には東北農民管弦楽団とのジョイントコンサートが初めて実施されました。

牧野 ジョイントコンサートは長い間実現しなかったことの一つです。30周年という節目は良い機会でした。東北からは約50名の演奏者が来札し、北海道と合わせて約120人のオーケストラです。さらに、小学生を含めた合唱団も参加し、300名を超える大所帯になりました。

バーは農業関係者ではあるけれど、農家さん自体は少ないんです。農民オーケストラと名乗る以上、農家さんが増えていくと嬉しいですね。土に触れているからこそ生まれる音楽ってあると思うんです。例えば、農村の風景にインスピレーションを得て生まれた田園交響曲を演奏する時、私たちは日々身近に感じているものを音楽として表現することがあります。時折、音楽家の方から「うらやましい」と声をかけられることがあるんですよ。生活のための演奏ではなく、商業主義でもなく、ただ「好きだから」演奏をする。その純粋な動機があるからこそ、私たちの表現は何にもとらわれることなく、自由でいられるのです。



ジョイントコンサートは2025年2月2日(日)に開催。1200名を超える動員を記録し、大盛況の中で幕を閉じました。2026年の演奏会は、空知管内深川市での公演を予定しています。

コロナ禍や東日本大震災など有事の際には、文化芸術に対する風当たりが強くなることがあります。牧野さんはどう感じますか？

牧野 確かに、音楽は衣食住に直接関わるものではありません。たとえ音楽がなくなっても、人は最低限の生活を送ることができる

30周年という区切りを迎えましたが、北海道農民管弦楽団として、今後の目標などはありますか？

牧野 現在、私たちのメン

生活のための演奏ではないゆえの自由な表現

ロング版インタビューをWEBで公開中



後志北東エリアで探すアート



08 景色の美しさと文学の奥深さを同時に味わう
崖っぷち書店



積丹半島の断崖絶壁に佇む温泉「岬の湯しゃこたん」内の書店。「崖」にまつわる本(3冊セット)をタイトルのみで購入する一風変わった体験ができます。2025年4月、リニューアルオープン予定。

09 2025年4月にオープンしたらこ尽くしの道の駅の駅「ふるびらたらこミュージアム」



日本初の「たらこミュージアム」として、たらこの世界観を丸ごと体験できるテーマパークのような道の駅です。ピンク色で統一された店内には、たらこアートやグッズ、たらこの歴史を学べる「たらこタイムマシーン」を展示しています。

刺激がいっぱい
後志北東エリアの
アートのスポット



各施設の
詳細は
WEBで
公開中

07 クオリティの高い流木アートが出迎える道の駅の駅オスコイ!かもえない



山と海に囲まれた自然あふれる道の駅で、神恵内村で獲れた魚介類を中心に水産加工品を販売中。注目は流木で作られたアートで、熊や鹿、犬など、さまざまな流木アートが随所に置かれ、来場者を楽しませています。

06 卓越した職人の技を感じる贅を尽くした客殿
鯨御殿とまり



道内の鯨番屋の中でも珍しい客殿を展示。麻模様の付け書院、檳榔樹の床柱など見所満載。なかでも廊下全面に施されている埋木細工は必見で、鶴・亀等の縁起物や島・船等の海岸線の景色が多数描かれています。



05 岩内町有形文化財1号の木造大仏
帰厚院



岩内最古の寺院で、高さ6.8m木造総金箔塗りの大仏は東京以北では最大といわれています。1月、8月を除く毎月第一月曜日の17:00~19:00は、毎回80人程が参加する「カレーの日」も開催しています。

04 共和町出身の洋画家の美術館
西村計雄記念美術館



約5,500点の豊富な所蔵作品を軸に、年に3回の展示替えを行いながら展示会を開催。春から夏は親子での鑑賞を促す「おやこで楽しむ展示会」を実施。今年は20号以上の大きな作品の展示会「大」作品展を開催します。

01 アートイベントやマルシェで賑わう複合施設
裏小樽モンパルナス



小樽の古い街並みを生かし、築100年の建物を含む3つの空き家を改修した複合文化施設。2025年5月にオープン一周年記念イベントと合わせて漫画家の工藤正樹、土田拓摩による二人展の開催を予定しています。

02 2000~1500年前の縄文時代に属する遺跡
フゴッペ洞窟



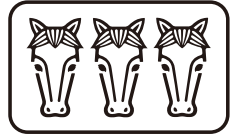
岩壁に800点を超すさまざまな刻画が残された貴重な遺跡。国内で壁面彫刻が見られるのは小樽市の手宮洞窟とフゴッペ洞窟のみで、シャーマンを表したものと推察される翼で仮装した人像などが多く描かれています。

03 音楽と星空を楽しむキャンプ場
ノチウアウトドアpark



「ノチウ」とはアイヌ語で星空の意味で、不定期で星空観察会を実施するキャンプ場。アウトドアと音楽の融合、地域活性化の取り組みとして、音楽フェスを実施するなど、多彩な楽しみを提供しています。飲食スペースも充実。

日常に溶け込むデザインの魅力に迫る！



株式会社
ミツウマ

▶最近店頭で並ぶアパレル商品のラインナップも増えていますが、こちらは昔から工場の作業員がかぶっている非売品の帽子。岡田さんいわく「社員は普段から見慣れているせいか熱烈なファンは少ないですが(笑)、このマークは私たちにとって親しみや安心感を与えてくれるシンボリックな存在ですね」。



1 919(大正8)年に日本初のゴム長靴メーカーとして創業した「ミツウマ」。同社は、小樽市民にとって地場企業の象徴的存在であり、市内の花園公園通りに架けられている「ミツウマ」のアーチ型広告看板は、街のシンボルとしても親しまれています。

1930(昭和5)年、現在のミツウマが北海道ゴム工業から「三馬護膜工業」と改称した時に生まれたコーポレートマークが、通称・ミツウママークです。初代社長の中村利三郎が、大正中期に良質かつ丈夫な織物を「三馬印」と呼んでいたことであやかって、ゴム靴の一級品に三馬



▲花園公園通りのアーチ型広告看板

のマークを付けたのが始まりといわれています。「三馬」の由来は、「馬の最も尊きを竜馬(りゅうま)と名づけ、次を神馬(しんめ)、次を駿馬(しゅんめ)とす」という、中国故事に登場する「竜・神・駿」の三馬を表したもので、以降、時代に合わせてアップデートしながら、今日のデザインに至っています。

長い時を経て、大切に受け継がれてきたミツウママークですが、2000年代に入り「古くからのファンには高い知名度を誇っていたものの、若い世代へのアプローチができていないことが大きな課題と感じていました」と語るのは、同社総務部の岡田秀敏さん。どうか若者にアピールできないかと考えていた中で、風穴をあけてくれたのは過去にミツウマ取材したテレビディレクターでした。「彼が独立した時に、『最初の仕事は、一番やりた

かったことにチャレンジしたい。ミツウマのマークを使ったアパレルやグッズの製作と販売を任せてほしい」と言ってくださって。現在も当社の従業員と同じくらい…いえ、それ以上にミツウマ愛を持ってプロモーションに尽力してくれています。これをきっかけにアパレル商品の販売をスタート。ちょうど「ミツウマ」創業100周年の節目の年(2019年)でした。

帯広のばんえい競馬場にポップアップストアを展開し、その日のメインレースのスポンサーになるなど、競馬ファンにも徐々に広がりを見せているミツウママーク。さらに現在は海の磯焼け対策の取り組みとして、ウニの殻を再利用し、ゴムに混ぜるウニ殻肥料



▲ここ数年、一番人気を誇るスノーブーツ。

「強くて履き良い」という製品のイメージを3頭の馬に重ねたロゴマーク
ミツウマ



の試験を実施。その新事業のブランドマークとして、ミツウマをもじった「ミツウニ」というネーミングとマークを発売し、SNSで話題になっています。さらに、直営のECサイトをリニューアルし、ミツウマの歴史や馬マークを生かしたサイト作りも計画中。3頭の馬が小樽から世界へ、のびやかに駆け出していく未来が楽しみです。



▲昔ながらの黒長靴「艶半長並底」。

ミツウマの商品購入はこちら



村本テント4代目店主 村本 剛

岩 内町のギンザ通り商店街の角に店舗兼工房を構える「村本テント」。丈夫で機能的な帆布バッグは、幅広い世代に愛されています。創業は1911(明治44)年。開拓時代を支えた馬具店として産声を上げた運搬の主役が馬から車へと移り変わると、馬具屋で培った縫製技術を活かしてトラックや船のシートを手がける「テント屋」に業態を転換しました。「バッグづくりを始めました。2代目の私の祖父です。農業や漁業、建設車両に卸していたシートやカバーの受注は冬が閑散期。通年で出来る仕事はないかと模索した末に生まれたのが、現在もお店の定番として並ぶテント生地で作った山菜リュックです。耐久性と収納力が評判で、近隣の管林署にも納めていたそうです」と話すのは、村本テント4代目、村本剛さん。剛さんの父であり3代目の憲次さんが帆布でバッグをつくり始め、オーダーメイドも受注するようになり、その知名度を上げていきました。「父は私に店を継がせようとは考えていなかったし、私

自身も意識したことはなかったんです」と振り返る剛さんは、札幌の電気工事関連の会社に就職し、営業職として10年間働いていました。転職が訪れたのは、帰省中に商店街で開かれた「手作り市」を手伝ったこと。「前職は工場で作られた製品の販売でしたが、自分の手で作った製品を、自ら自信と責任を持って売る、という魅力に気づいてしまったんです」。家業を継ぐために剛さんが岩内町に戻ったのは16年前。ミシンの扱いも初めてでしたが、シートやカバーの修理を通して技術を身につけていきました。帰郷から2年目に憲次さんは他界。ともに仕事をしたのは、ほんの1年弱でした。「シートや帆布バッグは、ほとんどがフルオーダー。お客さまの要望に応えながら、技術を磨いていきました」と話します。

現在、製作は母親と剛さんの2人体制。「母曰く、父よりも私の方が手先が器用だそうなんです(笑)。バッグは身につけるものですから、縫製の美しさには徹底的にこだわっています」と胸を張ります。本業のシートやカバーは耐久性がある反面一度納めると次の受注まで時間が開きます。テント屋も年々その数が減っていますが、「町の産業を支えてくれる業者さんのためにも、テント屋は続けていかなければなりません。バッグづくりは本業を維持するための手段でもあるんです」と語る剛さん。暮らしと産業に寄り添いながら、今日もミシンに向かっています。

村本 剛
(むらもと 剛)

岩内町生まれ。札幌でのサラリーマン生活を経て、2009年に岩内町に戻り、家業を継ぐ。
●村本テント
岩内町万代13-1
営業時間/8:30~19:00
(日曜・祝日9:00~16:00)、水曜定休(4月~10月は不定休)
<https://www.muramoto-tent.com/>



▲帆布バッグの原点「重成バッグ」。岩内出身の高校教師・重成先生から憲次さんがオーダーを受けて誕生しました。時代に合わせて改良を重ねながら、現在も人気商品のひとつとして店内に並びます。



最後に残った線は記憶の残響

物

心がついた頃から絵やものづくりが好きだった私が、美術の道を本格的に意識したのは高校3年の秋。当初はデザイン系の大学を希望し、美大受験予備校でデッサンを学んでいましたが、絵を描くことが面白くなり、進路を変更して北海道教育大学の美術コースを受験しました。

大学1年目の秋、東京の国立西洋美術館で『アルブレヒト・デューラー展』を観て、「版画といえば木版画」としか思っていなかった私はデューラーの銅版画に心を奪われ、版画を専攻。大学では、写真や現代美術、デザ



「after the rain」
2020年の初個展での展示作品で刺繍写真最初期。

インなど他分野の授業も受けることができ、特に現代美術の授業では、〈絵画専攻は平面作品しか作ってはいけないのか〉、〈素材や制作方法は安易に選んでいないか。楽だから、簡単だからではいけない〉、〈作品のサイズはそれがベストなのか。制作ベースの問題でサイズが小さくなってはいけない〉など、多くの学びを得、卒業して10年以上経った今でも戒められるような気持ちになります。

学生時代に作品制作のために、アルバイト代で一眼鏡カメラを購入。自分の目では捉えきれない細部を掘り下げるのに写真はとて有効だと気づきました。写真に興味を持つようになったというよりは、気がついたらカメラが私の記憶と眼の補助をしていた、という感覚です。

2016年の初頭、東京で

受けたの写真講座で「写真に手を加えた方が思い描いているイメージに近づくかも」と気づき、ペンや筆でのドローイング、写真を貼り合わせるコラージュなどを試すもしっくりこず。試行錯誤の末に「糸」という素材と「縫う」という行為にたどり着きました。最初の作品が完成した時、べらべらの紙だった写真にどくどくと血が流れ出したような感覚になり、ラテン語で動脈を意味する「arteria」と名付け、以降、刺繍写真の作品は全てシリーズ「arteria」としてまとめています。

私は、「抽象的な写真を撮る作家」「写真に刺繍する作家」と思われがちですが、今回の個展『浮遊する光、残響』は、布に刺繍をした作品のみで構成しています(写真上)。

シリーズ「arteria」では写真に沈む線、浮遊する線を針と糸を使って掬い上げたり強調したり

することに重きを置いていましたが、「その線だけになったときそれはどんな景色なんだろうか」と考えたことが刺繍のみの表現を試みるきっかけでした。

私の記憶の中の景色、カメラで記録した景色、そこから抽出された線が混ざり合い、反響し合い、最後に残った線は「残響」のようだと思います。

私の作品では、どんな場所で何を見たのかが重要ではありません。そこから残った微かな気配を通して、別の新しい景色に出会ったり発見があれば良いと思っています。

桑迫伽奈

北海道札幌生まれ、札幌在住。北海道教育大学岩見沢校美術コース卒業。写真をベースとした作品制作を行う。主な作品に、目で見えた景色と記録された景色の差異に興味を抱き制作している刺繍写真シリーズ「arteria」や、北海道をはじめとした日本国内の様々な土地の森で撮影し、「見ている景色の不確かさ」や「自然」という言葉の定義について考察したシリーズ「不自然な自然」など。

●<https://kanakuwasako.com>

入場
無料

北海道文化財団アールスペース企画展 vol.59

桑迫伽奈『浮遊する光、残響』

2025.2.18～4.25 9:00～17:00 ※土日祝休館 ※都合により臨時休館する場合があります。

場所／札幌市中央区大通西5丁目11大五ビル3F 問い合わせ／011-272-0501

マチカド
芸術
Vol.06

炎
小樽市



詳しいSTORYはWEBで



小樽の中心部に位置する小樽公園。桜の名所としても知られる市民の憩いの場に、1984(昭和59)年、小樽中央ライオンズクラブの25周年を記念して設置されたのが、小樽市ゆかりの版画家・一原有徳のモニュメント「炎」です。

アート選奨K基金事業

●アート選奨

北海道文化財団では、磯田憲一氏からの指定寄附をもとに、アート選奨K基金を創設。本道の文化の振興発展において敬愛すべき役割を果たしたと認められる個人・団体に、「アート選奨K基金賞」を贈呈しています。令和6年度の実績は、齋藤ちずさんに決定しました。(賞金10万円/記念楯)

齋藤ちず

(NPO法人コンカリーニョ理事長 演出家・プロデューサー)

1962年 愛媛県生まれ

1982年 北海道大学医学部進学課程入学

1985年 北大中退

2003年より現職



北海道大学在学中に北海道大学演劇研究会にて演劇を始め、1986年には札幌ロマンチカンアターほうぼう舎の創設に女優・会計係として参加。同劇団解散後1995年から演出活動とともにコンカリーニョのスペース運営開始。演出家としては年1~2作品をつくり、演劇ワークショップ講師活動も行う。またコンカリーニョ(1995~2002年)のホールマネージャーとして、ダンス公演やワークショップ、フェスティバルプロデューサーほか、多くの実績を収める。

まちとアートをつなぐ活動拠点となる劇場再建のための市民活動を展開し、2006年生活支援型文化施設コンカリーニョを再オープン。企画実施プロデューサーとして活動するとともに、社会的企業家と呼ばれ、劇場経営を行ってきた。

同法人では2004年~ターミナルプラザことにパトス、2009年11月~あけぼのアート&コミュニティセンター(ともに札幌市設置)の管理運営も担当する。

2026年夏には現職を退任予定。

平成19年度内閣府男女平等参画地域のチャレンジ賞受賞

人づくり一本木基金(長原賞・ステクレ・エング人づくり基金)事業

●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な個人及び団体等に「長原賞/地域貢献賞/奨励賞」を贈呈しています。

令和6年度は、有限会社高橋加工部が「地域貢献賞」を受賞しました。

◎地域貢献賞(賞金30万円/記念楯)

有限会社高橋加工部(帯広市/代表取締役社長 高橋敏文)

帯広市に所在する建具や家具を製作する企業。1897(明治36)年に設立された高橋木工場を前身とし、1951(昭和26)年に加工部門として独立、事業を開始。

社員には技能検定受験や技能五輪への出場を積極的に後押しするなど、地域のものづくり人材の育成に大きく寄与している。

募集中の事業

●令和8年度アートシアター鑑賞事業 公演企画の募集

「アートシアター鑑賞事業」では、道内外の優れた舞台芸術の公演を、道内の文化団体や市町村、市町村教育委員会、実行委員会等との共催により実施しています。この度、令和8年度に当該事業で実施する公演企画を募集しています。応募された企画の中から、当財団が令和8年度に経費の負担等を行う企画を選定します。



応募期限:2025年5月2日(金)必着

応募条件や方法など詳細については、財団ホームページ「令和8年度アートシアター鑑賞事業 公演企画の募集について」をご確認ください。

詳細はこちら▶<https://haf.jp/news.php?n=279>

お問い合わせ:公益財団法人北海道文化財団

☎011-272-0501(平日8:45~17:30)

開催予告

●北海道舞台芸術情報フェア2025

舞台芸術の公演企画の最新情報を道内の市町村や文化施設に提供し、次年度事業の検討に資するとともに、文化施設等と公演企画団体の相互連携を図ることを目的として、毎年「北海道舞台芸術情報フェア」を開催しています。2025年は、7月に開催を予定しています。

●北海道戯曲賞大賞受賞記念公演『迷惑な客』

第10回北海道戯曲賞大賞受賞作品『迷惑な客』(作:七坂稲)を、劇団サンプル主宰・松井周の演出により札幌で上演します。出演者オーディションも7月に開催予定。

期日:2025年11月15日(土)・16日(日)

会場:ジョブキタ北八劇場

●贅沢貧乏『わかろうとはおもっているけど』

山田由梨主宰の劇団・贅沢貧乏による初の北海道公演。2019年初演、2022年にパリ公演で好評を博した作品『わかろうとはおもっているけど』を上演します。



©Kengo Kawatsura

期日:2025年12月13日(土)・14日(日)

会場:クリエイティブスタジオ(札幌市民交流プラザ3階)

※開催予告のものについては詳細が決まり次第、財団ホームページ(<https://haf.jp/>)でお知らせします。

INFO



WEBマガジン「北のとびら」。冊子にはない情報も!ぜひご覧ください。

WEBマガジンはこちらから! <https://haf.jp/kitanotobira/>